

第9期生 富田裕樹さんの近況報告



富田 裕樹
(とみた ひろき)

池田市議会議員

諸先輩方、在学生の皆様、はじめまして。第9期生で、池田市議会議員の富田裕樹と申します。在学中には、先生並びに同期の皆様大変お世話になりました。誠に有難うございました。

私は、国会議員秘書時代に職業人学生として2年間在学しておりました。週1回しか授業に出席できない中(2回生時に地方議員出馬・汗)、何とか2年間で修了できたのは、先生方の温かいご理解とご協力、そして貴学の体制と同期のお力添えのお陰です。本当に有難うございました。

在学中には、「日本はこれからどのようにして経済成長を成し遂げていくべきか」との自身の問いに対し、1)巨大インフラの構築、2)インフラ輸出、3)基幹産業の創出をテーマに、学ばせていただきました。まだまだ道半ばですが、貴学で学んだことを社会に還元し、貢献していきたいと望んでおります。

さて、先日衆議院解散総選挙が行われたばかりですが、我々地方議員は所属する政党の国政候補者の応援に、地域で選対を組み戦いに挑みます。その選挙運動を通じて感じたことを近況として報告したいと思います。

例によって選挙前に政局が慌ただしく動きましたが、北朝鮮や中国など東アジア情勢が緊迫する中、日本に自民党以外政権担当可能な党は成熟しておらず、今回の総選挙においても安倍政権が圧勝することは、ある程度予測できたのではないかと思います。

ここでは、諸政策への記述は控えさせていただきますが、総選挙の大まかな感想として、「果たして二大政党制が日本に根付くのか。本当に必要性があるのか」という疑問を考えさせられる選挙になりました。

日本は1995年に小選挙区制度を導入しました。その意図は、政権交代を可能にし(デュベルジェの法則)、英米のように国内で二大政党が切磋琢磨しながら国家の成長を促せる政治体制を構築することにあるようです。しかしこれまでの経緯を観察すると、「果たして二大政党制が本当に根付くのか。かなり時間がかかるのではないのか」という疑念が生じました。また、これまでの日本の政治体制の成り立ちと経緯、日本文化と日本人の気質などを鑑みると、「不可能ではないのか。困難なのではないのか。政権を健全な路線へ補正できる健全野党があれば良いのではないのか」等、その答えを見出すことに熟考させられる総選挙となりました。

大選挙区制から選出される仕組みにおいては、ある党(会派も含め)が多数派をとるとは制度上非常に困難で(小さな地方自治体においては尚)、首長の行政運営や議会の運営においては全て「合意形成と調和」の手段なくして前に進めません。

そこで重要視されるのが「人間関係と付き合い」です。社会においては人間関係で物事を動かす(動く)ことは常識(王道)ですが、行き過ぎには問題が生じます。現在の日本の政治(特に大選挙区制を敷く地方自治体)ではそれらが制度上、必然的に重要視されることに問題があると指摘できます。結果的に、本来の政策論議よりも「協調・調和・慣習を守る」つまり「人間関係を平穏に保つこと」が重要視され、更に「強い人間関係の縛り(先輩後輩議員の関係や首長と各種団体など)」によって、新しい論議や新しい物事を遂行することが阻害されます。そしてそれらが要因となり「まちや社会」の停滞を招くという悪循環が日本の隅々で起こっています。

これらが俗にいう「しがらみ」ですが、これらは選挙制度に問題の一因があると言えます。国政においても同じこと(例えば世襲やコネが公認を得る重要な要素になるなど)が言えますが、現場で政治に携わる者として、選挙制度の近代化と改変なくして政治の前進(社会の発展)はないと、改めて感じさせられております。

今回、鴻鵠会では地域政策研究会が発足されるとのことで、皆様と出会い、政策の研究ができること、心待ちにしております。その際は、叱咤激励も含めご指導いただけたら幸甚です。